山東仏教の成立と変容過程

劉　　継　生

1．仏教東漸の分析視点
2．中国仏教寺院の誕生
3．仏教寺院の配置と構造
4．インド仏教の受容期
5．中国仏教の確立期
6．山東仏教の成立
7．霊巌寺の変遷
8．山東仏教の限界—儒教と道教の聖地

1．仏教東漸の分析視点

釈尊の初期の説法と布教は口授伝承であった。釈尊が80歳にしてクシナガラの地で入滅し，遺骨は信者たちに分けられ，塔（ストゥーパ，舎利塔）にまつられた。その3ヵ月後，最長老の弟子摩訶迦葉（マハーカッサパ）を中心に500名の弟子は，王舎城で集まって生前聴聞した法と律を誦出し，釈尊の教えを確定しようとした。これを第一回結集といい，編集された内容は初めての仏典となった。ゆえに仏典は釈尊の滅後まもなく出現したと考えられる。ところが，仏像はそれから数百年間も表現されず，信者の礼拝対象は塔だけであった。また仏陀の事跡を描いた仏伝図では，菩提樹，台座，足跡，法輪，その他で釈尊の存在を隠すような間接方法がとられ，主役の仏陀が表現されることはまったくなかった。これを破ってはじめて仏陀の姿が表現されたのは，紀元後100年ころのガンダーラ地方においてであった。仏像が出現した北西インドで同じクシャーナ朝時代に大乗仏教も興ったことから，仏像の出現に大乗仏教が関与したことが説かれている。しかしながらこれはいまだに証明されていない。いずれにしても仏像を誕生させたガンダーラ美術は，アレキサンダー大王の遠征に伴って広まったヘレニズムなどのギリシア文化の影響を受けた。この点は確かである。前3世紀にアショーカ王の帰依によって仏教はインド国教となり，インド仏教は全盛期を迎えた。前2世紀ころ，仏教は世界屋根といわれるパミール高原をこえて西域に入った。同時代に中国では，漢武帝（前156～前87）が，西域経略を打ち出し，張騫を大月氏に派遣して，匈奴を漠北に追い，パミール

高原から長安までの西域（シルクロードの東部）を開通しようとしていた。

仏教は西域の高原，雪山，草原，砂漠のような厳しい自然環境を克服し，大月氏，パルティア，ソグド，ホータン，クチャ，トゥルファン，楼蘭，敦煌，河西回廊を通って前2年には長安にたどり着いた[1]。この段階では大月氏王の使者が漢の官吏に仏法を口授したにすぎず，仏典も将来されず，寺院も建立されなかった。そうなると，仏典と寺院はどのようにして中国に伝わったのか。これについて『高僧伝』巻一には次のように記されている[2]。65年ごろ，後漢明帝（25～75）は金人が空から飛んできたことを夢に見，翌日群臣を集め夢の意味をたずねたところ，傅毅は次のように答えた。西域に神があると聞いたことがあり，その名を“仏”といい，陛下が見た夢はきっとそれであると。明帝はそれを信じて，蔡愔と秦景らの大臣を遣わして仏法を天竺（インド）に求めさせた。蔡愔らは中インドで迦葉摩騰と竺法蘭にあって洛陽に招来した。2人の高僧は仏典と仏伝図を将来した。明帝は一行を受け入れるため寺院を建立した。それ以来，中国仏教は波瀾万丈の経過をたどることになった。中国はインドとはまったく異なる文化体系を保持する社会だけに，仏教は変容を余儀なくされたのである。仏典漢訳だけでなく，寺院の建立，仏像の表現にもそれが及んだ。その変容は，地域の伝統文化が弱いほどインド的な要素の残存が多く，地域の伝統文化が強いほどインド的な要素の残存が少ないと考えられる。このような仮説をもって小論では，儒教と道教の中心地であり中国伝統文化がもっとも守られている地域である山東に焦点をあてて，山東仏教がどのように成立し，どのように変容したのかを分析してみることにしたい。

2．中国仏教寺院の誕生

教団の活動には，出家僧と信仰者の修行のための諸施設，仏像をまつり仏事供養を行う諸堂，仏舎利をまつる塔などの建物や空間が必要となる。それを提供するのは精舎である。精舎はインドで比丘たちの修行のため，雨季に一定の土地を画して止住させたことに始まった。この止住地をビハーラといい精舎と訳す。また衆僧のための園地の意で僧伽藍とよび，伽藍と略する。初期教団の活動に使用された代表的精舎として仏典に記されたものに，舎衛城の“祇園精舎”，王舎城の“竹林精舎”などがある。釈尊の入滅に際し，その仏舎利をまつるための塔が各地に建てられた。やがてそこが，仏陀を供養し，説法を聴聞する場として，在家信者たちの信仰の中心となった。仏塔はのちに伽藍内にも設けられるようになった。ガンダーラで仏像が製造されると，仏塔の前あるいは塔内に仏像をまつるようになった。仏像の礼拝は大乗仏教や密教の発達に伴い，諸菩薩，諸尊も加えて盛んとなったが，伽藍の原点はあくまで塔にあった。また，いくつかの大規模な伽藍は大学の機能も果たした。たとえば，最大規模の伽藍といわれるナーランダーには，インド各地のみならず，外国からも比丘たちが集まり，しかも，所属部派，大・小乗は問わない。学ぶのは大・小乗の教学のほか，サーンキヤなどの外教の学，論理，医学，さらに建築などを含み学芸万般にわたっていた。7世紀にナーランダーで留学した玄奘は，

学ぶ者の数は1万，教授者は4,500と報じている。

白馬寺は中国最初の仏教伽藍である[3]。後漢明帝が迦葉摩騰と竺法蘭のために，67年に洛陽城の西門外に建立させたものである。白馬の名は，仏典を白馬に乗せてきたからともいう。歴代の重修を経て近年も大修築が加えられて観光の名所となっている。“寺”とは中国古代の官舎の意である。仏教伝来に際し，インドや西域の伝法僧が中国に入った。伝法僧は外国人であるため，朝廷の外交官署である“鴻臚寺”に接待され仮住まいした[4]。その後，伝法僧がますます増え，朝廷の官舎から“寺”の字がはずされたことに加え，“寺”は僧の居住と活動の拠点の専用名称になった。白馬寺が建立された当初，寺内に経蔵，訳経，居住などの殿を築いたが，仏舎利塔を建てたかどうかは不明である。仏教建築にインド的な要素が導入された最古の例は，『三国誌・呉誌』に記されている後漢の笮融（？～197，後漢末期の武将）が彭城（いまの徐州）で建造した浮屠祠である。浮屠は浮図とも書き，仏陀や塔（ストゥーパ）の意味である。浮屠祠に金色の仏像をまつる九重銅槃からなる相輪を掲げた楼閣があった。この楼閣は中国独自の仏教建築に類型を与えたといわれる。

三国時代から西晋までの200年間に敦煌，開封，長安，建業（いまの南京），呉県（いまの蘇州）でも新しい寺院が建立されたが，その数は少なかった。寺院が激増したのは南北朝時代（439～589）である。南北朝の150年間に，仏教は社会に広く普及するようになった。数多くの仏教建築がつくられ，500以上の寺院を擁した南朝の都建康（南京）や，1,000をこえる寺院が林立した北魏の都洛陽のような都市も出現した[5]。北魏の献文帝が516年に洛陽で建造した永寧寺（塔刹に30重の承露盤をそびえ立たせた九重木塔があり，僧坊千余を有した大寺），梁（502～557）の武帝がしばしば捨身した同泰寺（533年同泰寺で行なわれた「般若経」の講経では，無遮大会と併設されたため，30万余の僧俗が参集したという）などは歴史上に名高い寺院である。隋の文帝は全国に寺院を建てて仏教による国家振興を図った。その政策は唐に受け継がれ，州ごとに則天武后は大雲寺を，中宗は中興寺のちの竜興寺を，玄宗は開元寺を建て，国家の安寧と皇帝の長寿を祈願させた。

唐までの寺院の組織は次のとおりである。寺内の衆僧を管理して寺務を執る役僧に上座，寺主，維那の三綱があり，ともに寺僧の推薦によって選ばれた。寺院には僧のほかに，得度前の童行，清掃や耕作などに従事する寺奴，寺戸がいた。寺の共有財産を十方常住物といい，その最大のものは土地であった。朝廷，貴族たちの施入，寺院みずからの買収，開墾によって広大な田土を占有し，寺院は貴族とならぶ大地主であった。また，仏教が中国社会に浸透していくにつれて，寺院はそれぞれの地域においていわば文化センターの役割を果たすようになった。4月8日の灌仏会，7月15日の盂蘭盆会などの法会には多くの民衆が集い，境内では縁日が立ちさまざまな演芸が催されて，にぎわいをみせた[6]。宋の時代になって禅宗が興隆すると，寺院制度にも変化が起った。寺院を代表する僧を住持といい，それには師から弟子へと伝える甲乙徒弟院と，広く諸方から名徳を招く十方刹との区別があり，とくに大刹の住持は勅命によって任ぜられた。寺院は宗派によって禅，教，律に分

類され，南宋中期には五山十刹制が定められた。さらに禅寺の行事規範である清規は，元代に『百丈清規』の重編があり，これにならって律宗，教宗でも清規をつくった。

3．仏教寺院の配置と構造

西晋までの仏教寺院は構造が単純で決まりがなかった。しかし，仏教の広がりに伴い寺院に建てられた殿堂も複雑になり，さらに隋から寺院の構造もパターン化されるようになった。寺院を構成する主要建築は山門，天王殿，大雄宝殿，蔵経楼，鐘楼，塔，僧坊があり，“七堂伽藍”といわれる。建物の配置は庭園式，自由式，縦軸式の3つのパターンがある。①庭園式は，塔あるいは仏殿を中心にしてまわりに建物を配置する方式である。②自由式は，複雑な地形変化に応じて建物を配置し，変化のなかで整合と均衡を求める方式である。③縦軸式は，主要な殿堂は一本の縦軸線（南北線）に配置する方式である。つまり，山門，天王殿，大雄宝殿，蔵経楼などの順で縦軸線にそって七堂伽藍を南向きに設置することである。さらに重要な仏殿にはその前あるいは左右（東西）に伽藍殿，祖師殿，観音殿，薬師殿のような配殿が設置される。僧侶の生活区は東西両側に配置される。左側（東側）には僧房，厨房，食堂，庫院があり，右側（西側）には朝礼者の宿泊区がある。仏塔の位置は中心部ではなく，寺院の後方あるいは離れた場所に設置される。多くの寺院は，整列，対称，一目瞭然の縦軸式となっている[7]。

(1)　山門と天王殿の内部構造

寺院に入る門を山門といい，寺院一山の正門を意味する。山門は大きな中央の門と左右の門と三つ連ね一門としたものであり，三門ともよばれる。3つの門はそれぞれ違う意味がある。真ん中は空門，左は無相門，右は無作門である。これを“三解脱門”ともいう。門から入った人は解脱を得ることができる。大寺院の山門は殿堂式に建てられている。これを山門殿といい，殿内両脇には金剛力士像が安置される。金剛力士は伽藍守護の神であり，口を開けた阿形（あぎょう）と口を閉じた吽形（うんぎょう）に作られ，手に金剛杵を持ち，勇猛・威嚇・半裸の相となっている。山門の脇には鐘楼，鼓楼が建てられる。鐘楼には時刻や緊急情報などを知らせるため鐘がある。太鼓を置いた楼を鼓楼という。鐘楼は高層とされることが多く，重い鐘を支える補強の構造をもつ。

山門に入った後，最初に設置された仏殿は天王殿である。天王殿は破邪顕正をし，仏・法・僧の三宝を守る役割である。殿内には弥勒菩薩像は南向きに安置される。その背後には護法神である韋駄天菩薩がくる。弥勒菩薩の両側に四大天王が安置される。弥勒は釈尊に次いで仏になると約束された菩薩であり，兜率天に住み，釈尊入滅後56億7千万年の後この世に下生して，竜華三会の説法によって釈尊の救いに漏れた衆生をことごとく済度するという未来仏である。韋駄天はもともとバラモン教の神で，シヴァ神の子とされる。仏教に入って仏法の守護神となり，とく

に伽藍を守る神とされる。四大天王は四方を守る護法神である。四大天王は甲冑をつけた忿怒の武将形で邪鬼を踏む形象で須弥壇の四方に安置される。これは須弥山の中腹にある四天王天（または四大王天，四王天）の四方に住んで仏法を守護する護法神である。東方に持国天（提頭頼吒），南方に増長天（毘楼勒叉），西方に広目天（毘楼博叉），北方に多聞天（毘沙門）。『増一阿含経』や『阿育王経』には，四天王が釈尊のもとに現れて帰依したことや，釈尊の涅槃の後に仏法を守護することを釈尊から託されたことが記され，『金光明最勝王経』には，四天王が釈尊に対し本経を信奉する人々とその国家を守護することを誓ったことが説かれている。

(2)　大雄宝殿の内部構造

天王殿の北には寺院の中心位置を占める大雄宝殿がある。なぜ“大雄”が付けられたのか。『法華経・涌出品』には“善哉善哉，大雄世尊”，『法華経・授記品』には“大雄猛世尊，諸釈之法王”と記している。すなわち，大雄は仏に対する尊称であり，仏は偉大な法力をもち四魔（煩悩魔，五陰魔，死魔，自在天魔）を降し伏せることができる。これを拠り所として，寺院の正殿が大雄宝殿と呼ばれるようになった。大雄宝殿は本尊を安置する主要堂であり，伽藍の中心をなす正殿であり，仏殿ともいわれる。大雄宝殿は，本体は五間に裳階つきの大型殿で，中央の天井を高く張り，減柱造で内部柱を少なくして広く高い空間をつくり，組物は唐様三手先詰組とし，外観は重層の荘厳な殿堂である。

大雄宝殿で供養される本尊は時代や宗派によって違うが，一尊仏と三尊仏のどちらかである。一尊仏の場合は釈迦如来である。よくある姿勢は成仏相，説法相，旃壇仏像の３つである。①成仏相：釈尊の菩提樹下成仏得道を表す。結跏趺坐，定印（左手の上に右手を重ね臍前におく）あるいは触地印（右手を膝の前で垂れ指先を地に向ける。釈尊の修行中に悪魔が悟りを開くことを妨害したが，この印によりそれを退けたという）。②説法相：釈尊の弟子たちへの説法時の状況を表す。結跏趺坐，転法輪印（説法印ともいう。両手を胸の前にあげ，掌を対向させ，大指と他の１指とを捻ずる）。③旃壇仏像：釈迦如来立像，施無畏印または与願印。施無畏印は諸仏の通印と称され，五指を伸ばし，掌を外に向け肩の前にあげる。衆生を苦難から解脱させる意味が表される。与願印は，五指を伸ばし，掌を外に向けて垂下し膝の辺りにおく。衆生に願望を実現させる意味が表される。

三尊仏には三身仏と三世仏の２パターンがある。三身は仏の法身・報身・応身のことである。中尊は法身であり，宇宙の真理としての仏である。たとえば毘盧遮那仏。左尊は報身であり，修行によって得られた功徳に荘厳された仏である。盧舎那仏や阿弥陀仏などとして具象化された仏がこれに相当する。右側は応身であり，衆生済度のために種々に身を変化して姿を現した仏である。釈尊はこの応身に含まれる。

三世仏はさらに２つに分けられる。まずは３つの空間世界に同時に存在する仏である。真ん中は娑婆世界（苦しみと忍耐が多く，人間の住む世界）の釈迦如来であり，脇侍は文殊，普賢の２菩薩である。左側は東方浄瑠璃世界の薬師如来であり，脇侍

は日光，月光菩薩である。右側は西方極楽世界の阿弥陀如来であり，脇侍は観音，勢至菩薩である。もう1つは堅三世仏であり，過去・現在・未来の三世に存在する仏である。真ん中は現在世の釈迦如来，左側は過去世の迦葉仏，右側は未来世の弥勒仏となっている。

4．インド仏教の受容期

(1) 後漢に始まった仏教伝来（前2～219年）

仏教の中国初伝は前2年であった。67年に白馬寺が建てられた後，迦葉摩騰と竺法蘭は白馬寺を道場に仏典漢訳に励んだ。漢訳された最初の仏典は『四十二章経』であった。後漢末期になってからインドと西域の伝法僧は相次ぎ中国に到った。パルティアからの安世高[8]と安玄[9]，大月氏からの支婁迦讖[10]と支曜[11]，インドからの竺僧塑[12]，康居からの康孟詳[13]などがあげられる。これらの高僧はたくさんの仏典を訳出した。高い評価を得た安世高は，147年洛陽に至り，167年までの20余年の間に『安般守意経』等34部40巻の仏典を訳出した。

こうした訳経のほかに，後漢の仏教の特徴として次の3点を上げることができる。①皇家の信仰と中国人の出家がはじまった。明帝の義弟の楚王英が熱心な仏教者であったことは『後漢書』に記されている。また，陽城侯劉峻が出家したことは『僧史略』に記されている。②明帝求法の伝説は，全身より光明を放って空中を自由に飛翔することができる仏教の神通力への魅力と重なった。しかし，神通力を修得するには持戒や禅定を積む必要がある。この実践の広がりも仏教の定着を促進した。③仏法が中国伝統の神仙方術に結びつけて受け止められた。人間の苦悩を解決して民衆を救う道や法であるという仏法の本質は，まだ認識できるようになっていなかった。

(2) 北方から南方へ広がった三国の仏教（220～265）

三国は魏，蜀，呉が中国を統治していた時代である。この45年間の仏教伝来は，地域範囲が魏から呉に広がり，訳出された仏典も量と質の両面において高まった。その特徴は次の3点にまとめられる。

①仏法が長江を渡って南方に浸透した。支婁迦讖（支謙）は呉の支配者である孫権に仏法を説き，孫権の信頼を得て博士の高官を与えられた。また康僧会[14]のために孫権は建業（いまの南京）に仏塔を建てさせた[15]。また，孫権の意思で儒教，道教，仏教についての優劣議論が展開され，仏教が呉でもっとも尊重される宗教となった。

②仏典漢訳が充実した。魏の訳経僧は主に曇柯迦羅[16]，曇帝[17]，康僧鎧[18]，帛延[19]などであり，洛陽で訳経を行った。呉の訳経僧は主に維祇難[20]，支婁迦讖，康僧会などであり，仏典漢訳は武昌からはじまり建業の地で完成した。とくに支婁迦讖と康僧会は，祖先が西域であり，生まれは中国であったため自身の中国文化への造詣が深い。支婁迦讖は『維摩詰経』『阿弥陀経』『法句経』『太子瑞応本起経』

などを訳出した。訳出された般若部経典は，仏教と玄学との結びつきを促し，仏教の民衆への広布に貢献した。

③戒律がはじめて伝来した。インド仏教では，戒律はすべての信仰者の必須条件である。しかし，後漢から三国までの出家は髪を剃るだけで，仏の定めた戒律を受けなかった。250年にインド律学僧雲珂迦羅が洛陽に来て，入門は仏が定めた一切の戒律を守るべきと唱えた。このため洛陽にいる衆僧は共同で戒律をまとめた。しかし，迦羅はこれが複雑すぎて社会に受容されないと考え，自ら『僧祇戒心』を訳出した。これが『摩訶僧祇部』の戒本一巻である。それ以来，中国の仏教入門は戒律を受けるようになった。一方，パルティア出身の僧で律学にすぐれた雲諦も255年に洛陽に入り，白馬寺で『四分律』を訳出した。その後，『四分律』は中国律宗の経典となった。

(3) 大乗思想が伝来した西晋の仏教（265～316）

西晋の仏教は265～316の51年間である。以下にその特徴をあげるが大乗仏典が大量に訳出されたのがその最大の特徴である。

①西晋の時代には333部の仏典が訳出された。洛陽には安法欽・法立・法炬，陳留には竺叔蘭，広州には彊梁婁至，長安には支法度がいたが，もっとも貢献の大きい訳経僧は敦煌に住んでいる竺法護（239～316）であった。敦煌菩薩，月支菩薩と称された竺法護は，数代にわたって敦煌に定住した月支の末裔で，幼少から六経などの中国の古典を広く学習した。彼の生きた時代は，インドではクシャーナ朝で大乗仏教が興隆し，大乗仏典が陸続と創作された時代であった。しかし，その大乗仏典の多くは中国へ伝来しなかった。この状況の改善を志した竺法護は，師の竺高座とともに西域諸国を遊歴して諸言語を習得し，仏典の原本を収集して長安に帰った。中国各地の熱心な帰依者（たとえば長安の聶承遠，聶道真父子）の助力を得て，竺法護は重要な大乗仏典を翻訳しつづけた。竺法護は40余年にわたって150部におよぶ仏典を翻訳した大訳経家となった。鳩摩羅什の訳経活動が『光讃般若経』『法華経』『維摩経』『首楞厳経』などの諸経の改訂からはじまったことを考えると，『出三蔵記集』に記されるような「経法の中華に広流する所以は護の力なり」という評価も過言ではない。

②西晋では般若思想と大乗仏教の中国社会への浸透がはじまった。『賢劫経』『大哀経』『十住毘婆沙論』などの訳出は般若性空の思想の広がりを促した。『維摩詰経』は清談全盛の西晋から東晋にかけての貴族社会に受容され，『光讃般若経』も老荘思想がもてはやされた西晋の思想界に受容された。また，竺法護が訳出した『正法華経』は鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』の登場以前に，法華信仰および観音信仰を中国にもたらした重要な経典である。

③道教との摩擦の中で偽仏典が現れた。西晋の時代に仏教は広く信仰され多くの民衆に受け入れられた。当時の2大都市の洛陽と長安だけで寺院が180ヵ所があった。このような仏教広布の勢いに道教は危機を感じるようになった。老子化胡説は，老子が仏教を説いたという虚構の説である。すなわち，西方の関所をこえて姿

を隠したと伝えられる老子は，実は胡地に赴いて胡人を教化するために仏教をはじめたのだといい，したがって仏陀は老子の変化身にほかならないと説かれた。166年の後漢の襄楷の上奏の一節に，「老子は夷狄に入りて浮屠となる」とあった。西晋の道士の王浮が道仏二教の邪正をめぐる僧侶との論争に敗れた嫉妬で偽造した『老子化胡経』がその最初の説であった。

5．中国仏教の確立期

317～420年は東晋五胡十六国の時代である。南方は漢民族が中心となっている東晋政権であり，北方は五つの異民族（匈奴，羯，鮮卑，テイ，羌）が中心となった16を超える政権があった。これを五胡十六国という。五胡十六国の君主は中国伝統の儒教よりも西方伝来の仏教を好み，仏教を利用して社会統治を安定させようとした。この104年間に仏教は南方と北方で異なる発展を辿った。とくに，一時華北を統一して西域に及んだ前秦（351～394）および長安を都にする後秦（384～417）の仏教は，中国仏教史においてきわめて重要な地位を占めている。

(1) 仏法の実践を重視した仏図澄の大宣教

インドや西域からの伝法僧のほとんどはサンスクリット仏典を将来して翻訳に努める訳経僧であったが，中には訳経を全く行わず，実践だけを重視する伝法僧もいた。その代表者は仏図澄（232～348）である。仏図澄は西域の亀茲出身で，9歳で出家，敦煌を経て310年に79歳で洛陽に到った。『高僧伝』の記載によると，仏図澄は，華北を制圧した暴虐非道の後趙君主である石勒と石虎に仏法を説き，国の軍師として重用され，戦地において数々の予言を行った神通力を持った高僧であり，石勒より“大和尚”の称号を与えられた。また，『晋書』の記載によると，仏図澄が凶暴な性格であった石勒と石虎の信頼を獲得し，深い帰依を受けた理由は，高邁な教理や人目を引く神通力ではなく，仏図澄の持戒堅固な生活態度にあった。自らの持戒は言うに及ばず，石勒や，石虎のような残虐さで知られる五胡の君主に対しても，五戒の堅持を求めたという。

仏図澄には訳経や著述がないにもかかわらず，外来の仏教が中国に根づき発展したのは，彼の79歳から117歳までの38年にわたる実践的な宣教に負うところが大きい[21]。中国の仏教史における仏図澄の貢献は次の3点にまとめられる。①石虎に対して漢人の出家を公許するよう導いた。②893ヵ所の寺院を建立し，1万人の弟子を育成した。③弟子たちが中国仏教の基礎を築き上げた。竺法護のような訳経僧のもとではなく，仏図澄のような宣教僧の門下から正統的な中国仏教の提唱者が現れたところに，天台宗や禅宗に代表されるような後の実践的な中国仏教の原形を見ることができる。

(2) 伝法僧と求法僧による空前の訳経

五胡十六国（北方）の仏教の代表者は道安[22]と鳩摩羅什[23]であり，東晋（南方）

の仏教の代表者は慧遠と仏陀跋陀羅であった。南北の両地域で行われた仏典漢訳は前代未聞の成果をあげた。五胡十六国の仏教の特徴として次の4点を指摘することができる。第1は『阿含経』と『阿毘曇』の創訳であり，これは主に仏図澄の弟子道安と道安の弟子慧遠の貢献である。第2は，大乗重要経論の訳出であり，これは主に鳩摩羅什の貢献である。仏図澄と同じ亀茲出身の鳩摩羅什は，『大品般若経』『金剛経』『法華経』『中論』『成実論』などの74部384巻の重要仏典を訳出した。中国仏教の発展と各種宗派の形成に巨大な貢献を与えた。第3は，密教経典の訳出である。帛屍梨蜜多羅は西域から中国に赴き，建康（南京）建初寺（孫権は康僧会のために建てた寺院）に住み，317～322年の6年間に『大孔雀王神呪経』『孔雀王雑神呪経』『大灌頂経』などを訳出した。第4は，中インド出身の僧である曇無讖（385～433）は，カシミールや亀茲をへて敦煌に至り，412年に北涼により武威に迎えられ，『大般涅槃経』『金光明経』『大集経』『大雲経』『海竜王経』などを訳出した。これらの仏典は中国仏教の発展にとって重要な意義をもち，とくに『涅槃経』の影響が大きい。

一方，インドへ求法する中国人僧も増えた。このなかで法顕の功績はもっとも大きい。法顕（337～442）はわずか3歳で沙弥となり，20歳のとき大戒を受けた。法顕は中国に律蔵が完備していないのをなげき，399年に63歳で同学の僧4人と長安を出発してインドへ向かった。敦煌から西域に入り，ヒマラヤを越えて北インドに至り，インド各地やスリランカで仏典を求め，仏跡を巡礼する旅をつづけた。30余国を遍歴したのち，戒律などのサンスクリット経典をもって，海路帰国の途についたが，暴風雨に遭い，412年に山東省にひとり無事に帰着した。この14年間にわたる旅行中の見聞を著したのが『仏国記』（別名，『法顕伝』，『歴遊天竺記伝』）である。建康の道場寺で仏陀跋陀羅とともに『摩訶僧祇律』『大般泥洹経』など6部63巻にのぼる経律を漢訳した後，荊州辛寺で86歳で没した。『大般泥洹経』は竺道生らによって研究され，涅槃宗成立の契機となった。法顕はまた，西域やインドの弥勒信仰を中国に伝えたことでも知られる。

(3)　新しい論と教義の形成

慧遠（334～416）は，中国浄土教の祖師といわれ，念仏の結社白蓮社の開祖とされる。13歳で故郷の山西省寧武を離れ，許昌，洛陽に遊学し，儒教の六経と老荘の玄学を修めた。21歳で恒山の寺院で道安の弟子となり仏門に入った。379年に廬山で先輩の慧永にとどめられ，江州刺史の桓伊の寄進で東林寺を建て，そこに住した。それ以後，416年に83歳で没するまで「影，山を出でず，迹，俗に入らず」の生活をつづけた。廬山での36年間，慧遠が広げた仏法の感化は江南全域に及んだ。慧遠は，廬山に赴いたインド僧伽提婆に『阿毘曇心論』『三法度論』，曇摩流支に『十誦律』，仏陀跋陀羅に『修行方便禅経』などの仏典の訳出を依頼した。また，鳩摩羅什が長安に迎えられると，慧遠は鳩摩羅什と往復書簡を交わし，経典についての疑問点等をただした。その書簡集が『大乗大義章』である。また，慧遠は道安の般若学を継承し，“念仏三昧”の教義を説いたのである。念仏三昧は，無常観と

三世因果応報の本質を理解し，『般舟三昧経』をもとにしたものである。慧遠を中心とする廬山教団が隆盛となるにつれ，当時の国家権力との摩擦は避けられなかった。東晋の実力者桓玄が，仏教教団の王権への従属を要求したが，慧遠は『沙門不敬王者論』を著して反対した。

道生（355～434）は幼少時から竺法汰に随い出家し，15歳で講座に登った。当初は廬山で慧遠に師事した。401年に鳩摩羅什が長安に到来し経論を翻訳することを知り，慧観，慧叡，慧厳らの僧たちと共に北へ向かい，羅什の弟子となり，羅什門下四聖の1人に数えられた。羅什は法華経を訳したことで高く評価されたが，道生は羅什の思想を受け継ぎ，法華経義疏を著し，後の天台智顗へと繋がっていく法華経解釈をはじめた。このことにより当時は，唯識また般若教学に傾いていた教学を法華経へと導いたといわれる。羅什が413年没した後に，法顕が訳した大般泥洹経六巻（涅槃経の前半部）が伝えられ，羅什門下の衆僧は泥洹経の研鑽をはじめた。しかし，衆僧が経典の表面に固執して深く仏意を思惟しないことに対し，道生は“悉有仏性説”に基づいて“頓悟成仏”の義を主張し，二諦論，法身無色論，善不受報，仏性当有論などを著した。また，当時の涅槃経は前半部しか伝わっておらず，そこには闡提（仏法を否定し誹謗し悔悟しない人）は成仏しにくいことが説かれていたのである。ところが，道生は泥洹経から仏意を悟り，“闡提成仏”の義を宣揚した。しかし，この義は他の衆僧に理解されなかったため道生は追放された。その時に道生は「我が所説は，もし経義に反すれば現身において癘疾を表さん。もし実相と違背せずば，願わくば寿終の時，獅子の座に昇らん」と誓い，蘇州の虎丘寺に立ち去った。430年に道生は再び廬山に戻った。同年，南宋に曇無讖訳の北本涅槃経（泥洹経に書かれていない後半部を含む涅槃経）が伝わり，慧観らが法顕訳の六巻泥洹経と統合訂正して『南本・大般涅槃経』を完成した。そこには闡提も成仏することが説かれており，道生の唱えた闡提成仏の義が正しいことが証明され，衆僧たちはその先見の明に感嘆し服したといわれる。道生の業績は，唯識・般若から法華，また涅槃へと導いたことは，後に智顗が開いた天台宗にも影響を与えたといわれる。

僧肇（374～414）は長安の人であり，若くして中国古典に通じ，とくに老荘思想を好んだ。しかし，『維摩経』を読んで深い啓発を受けたことをきっかけに仏教に帰依した。のち鳩摩羅什に師事して羅什の伝えた竜樹の大乗教学を学び，師の訳経事業も手伝った。物不遷論・不真空観・般若無知論・涅槃無名論・宗本義の五論からなる『肇論』は，仏法の新しい論として，老荘的表現を取り入れながら般若空の立場を鮮明にし，中国仏教史のみならず中国思想史にも多大な影響を与えた。

(4) 造像技術の発達と石窟彫刻の盛行

東晋五胡十六国の時代に寺院に仏像を安置して信仰することが広まった。そのため多様な材料を用いて仏像をつくる技術が発達した。有名な作品には，道安が襄陽檀渓寺で造った丈六の釈迦金像，竺道隣が山陰昌原寺で造った無量寿像，戴逵と息子が山陰霊宝寺で造った阿弥陀仏と脇侍二菩薩木像などがある。また，銅造菩薩立

像をはじめいくつかのガンダーラ風の金銅仏像も造られた。中にはまだ現存している仏像もある。たとえば，サンフランシスコ・アジア美術館蔵の銅造如来座像は，後趙の建武4年（338）の銘をもち，ガンダーラ風を基にした中国化の様式が認められる。さらに，366年に敦煌で莫高窟が開鑿された。以後中国では石や銅を主な材料とする単独像と，石窟や磨崖の造像が盛行する。また，著名な画家顧愷之（344～408）は中国最初の仏画家でもある。作品には『浄名居士図』『八国分仏舎利図』『康僧会像』などがある。

6．山東仏教の成立

(1) 泰山僧朗が開いた山東仏教

仏図澄が348年に没した後，弟子たちは各地に赴いて宣教をつづけた。道安は山西・河南・湖北などに入り中国仏教の確立に尽力した。法和は四川に行き西南仏教の教学を開いた。法汰は南京に行き江南般若学の大家になった。そのなかに京兆人（現在の陝西西安）竺僧朗（生死年不詳）もいた。竺僧朗は中国伝統文化の中心地―山東での宣教を決心し，351年に山東泰山に入った。かくして山東仏教の幕が開けたと『高僧伝』には記されている。外来宗教の伝播がほぼ不可能と思われる儒教・道教の聖地に仏教を広げた勇気ある行動は後世に敬われるところとなった。

漢武帝以後は，儒教が国家治世の原理として圧倒的な勢力をもつようになった。漢の朝廷で活躍した儒者の多くは山東出身であった。東晋五胡十六国の時代は弦学が興隆したにもかかわらず，儒教の発祥地および大本営であり，道教の中心である山東では伝統宗教が依然として支配的存在だった。とくに泰山は，孔子の生誕地曲阜に近く，道教のもっとも重要な霊山であり，黄河文明のシンボルでもある。泰山主峰の玉皇頂は標高1,545m，山麓地帯は安定した自然をもち，大汶口文化，竜山文化などの新石器時代遺跡も多く分布する。平坦な華北平原の東にそびえ立つため古くから注目され，五岳のうちの東岳として岱宗（五岳の首峰）とも呼ばれた。『詩経』閟宮に「泰山巌巌，魯邦所坪（けわしくそびえる泰山は，魯の国から行くところ）」とあるように，多くの古典にも記されている。泰山は伝説の聖人や孔子，孟子も登り，中原諸侯の会盟が行われるなど，黄河文明の象徴的存在である。天子の行う最高の儀式とされる封禅（皇帝が天を祭る）は，泰山で行うものとされ，秦の始皇帝からはじまった。以後，漢の武帝，後漢の光武帝・章帝，唐の高宗・玄宗，宋の真宗，清の康熙帝などがこれに倣った。泰山の山上山下に堂廟が建てられ，露岩には題字が刻まれるなど，文人墨客の訪れる名勝の地となっていった。これらの訪問者の残した詩詞の類も数えきれない。山下の天貺殿は宋代に建てられた宮殿式建築であり，それより山頂に至るまで紅門宮，万仙楼，壺天閣，普照寺，中天門などは著名な道観である。

山東に仏教を広めるため，僧朗は仏図澄と同じように，仏典漢訳ではなく，寺院を建て教団を形成し，それを拠点にして活動する方法をとった。僧朗は351年に泰山西北の金輿谷崑瑞山に最初の精舎を建てた。この精舎は“朗公寺”とよばれた

が，隋の時代に神通寺に改名された。神通寺には隋代に建てられた四門塔と唐代に開鑿された千仏崖，および朗公塔がある。611年に建てられた四門塔は中国で現存するもっとも古い塔の一つといわれている。金輿谷には虎が出没するため人々は1人で山を歩くことができなかった。必ず杖を持ち，群集で歩かなければ危険であった。しかるに僧朗がこの谷に住むようになってから，虎は人に危害を加えなくなり，夜も無事に通行できるようになった。そのため百姓は僧朗の神異とその高徳をたたえ，この金輿谷を“朗公谷”と呼ぶようになった[24]。朗公の神異は『神僧感通録』のなかに次のように記されている。「旧谷虎多し。朗の之に居するより，家犬の如し」。北魏酈道元（？～527，中国はじめての地理学者）は『水経注』巻八で次のように記している。「沙門竺僧朗あり。少にして仏図澄に仕えり。碩学にして淵通，尤も気緯に明らかなり。此の谷に隠る。因りて之を郎公谷という。」

僧朗は『放光般若経』についても造詣が深かった。これについては『高僧伝』巻五に次のような記述がある。「竺僧朗は幼少より諸方を遊歴したが，のちには長安において放光般若経の研究と講義に励んだ」と。僧朗は泰山に入ってからも講義をつづけた。前秦永興時代（357～358），隠士張忠は“永嘉の乱”を避けるため泰山西北の支脈である霊巌山の主峰である方山（別名，玉符山，海抜668m）に入り，生気を吸い込み仙人になるための修行に励んだ。隠士張忠は道術にすぐれた道士であり，彼の伝記は『晋書』巻九十四「隠逸伝」に記されている。僧朗は張忠と議論したり交流したりする仲間となり，彼の道場でしばしば『放光般若経』を講義した。『神僧伝』の記載によると，朗公の説法は，毎回，聞く者千人余。ある説法のとき，精彩のところになると，周りの石も感動してうなずいたという。朗公は，この山には霊があり，説法に感化されており，涅槃したらここに骨を埋めると決意した。それ以来，この山は霊巌と呼ばれるようになった。僧朗は霊巌山を切り開き，霊巌寺の建設を始めた。

(2) 六ヵ国の君主に尊信された僧朗

碩学僧朗は，仏法に精通するだけではなく，占卜にも通じており，吉凶の予言に卓越した能力をもっていた。さらに，虎を征服して石を感化させたという神異は，僧朗の名を広く伝播させ，神聖として崇拝されるようになった。戦争に勝つため前秦皇帝苻堅（351～384）は僧朗を招こうとした。苻堅は深い敬意をはらった書簡を送り，僧朗を都に迎えるための使者と車を派遣した。その時の土産品は紫金数斤の金の仏像およびあや絹30疋であった。これに対して僧朗は，自分の体力の衰えを理由に苻堅の要請を断った（唐・道宣『広弘明集』）。363年に苻堅は仏教教団の粛清にふみきったが，僧朗の教団は戒律を厳正に守っているので，その粛清の対象から外したのであった。この事実は『高僧伝』に記されている。僧朗はさらに北魏の初代皇帝拓跋珪（371～409）からも尊信を受けた。拓跋珪も軍事顧問として僧朗を迎えようとした。胡族の君主たちだけでなく，東晋の孝武帝司馬曜も僧朗に書簡を送った。そのほか，後燕皇帝慕容垂，南燕皇帝慕容徳，後秦皇帝姚興も竺僧朗に書簡を送った。とくに南燕皇帝の慕容徳は使者を派遣して，僧朗に東斉王という称号

と，奉高（いまの泰安）と山荏（いまの長清）の2県を下賜しようとした。そこで僧朗は東斉王の号を辞退し，2県の租税だけを受けた。

多くの君主からの招きがあったにもかかわらず，僧朗は85歳で没するまで霊巌寺から一歩も外へ出ることはなく，ひたすら修禅と読経にはげんでいた。僧朗は，朝廷からの高い評価と財政支持を生かして霊巌寺の建設と山東教団の拡大を大いに促した。霊巌寺を初期には十区しかなかった精舎を数百区までに拡張し，多くの僧が同時に修行できるようになった。

(3)　山東仏教における教団の変容

北魏太武帝は446年に寺院から武器を見つけ出したことを理由に，中国はじめての国家権力による仏教迫害を発動した。これを魏武の法難という。多くの僧尼は寺院から追い出され還俗し，大量の寺院が壊された。霊巌寺は520年までの約70年間にわたって荒廃したが，その後は法定禅師の努力によって再建された。その後の50年間は，霊巌寺は拡大をつづけて全国的に有名な大寺院になった。第2回の周武の法難は574年と577年の2回にわたり，このときは文武百官を集めて儒・仏・道の三教の優劣を論じさせたのち，仏教のみならず道教も廃された。霊巌寺も2度壊され衰退した。しかし周武帝が没した後，法難が解除され，仏教は復興の道を再びたどった。これにともない霊巌寺も復興して更なる発展を遂げた。

595年に隋文帝は岱岳を参拝したのち，仏を表敬するため霊巌寺を訪れた。皇帝の来訪は霊巌寺の地位と知名度を大きく高めた。唐の貞観時代（627～649），高僧慧崇は霊巌寺を再建するための新しい計画を打ち出し，敷地をさらに拡張し，千仏殿や御書閣などの建造をはじめた。この大規模な建設によって霊巌寺は大きく発展した。その後も般舟殿や辟支塔などが陸続と建立された。665年に唐高宗と皇后武則天は封禅のため泰山に行く途中で霊巌寺に10日間も滞在した。皇帝，随行官員，数千人の兵隊を同時に受け入れて接待できる霊巌寺は，その地位，規模，実力を世に示した。唐元和年間（806～820），宰相李吉甫は『十道図』を編纂し，霊巌寺を，浙江省天台宗の国清寺，湖北省江陵の玉泉寺，江蘇省南京の棲霞寺と一緒に“四絶”と称した。しかしながら，唐武宗は会昌五年（845年）に第3回の会昌の法難を発動した。霊巌寺も逃れられず6年間の荒廃を経験し，851年に，住持が朝廷に陳情して霊巌寺の修復が認められた。

宋代（960～1279）に拡張整備された霊巌寺は史上最大規模に達した。1008年，宋真宗が泰山封禅に行く途中で霊巌寺を訪れた。1066年から彩絵塑像羅漢像の造像が始まった。殿閣50余，禅房500間，僧侶500人を擁した霊巌寺は，“四絶之中処最先”と称され，四絶のトップの位置を占めるにいたった。元の初代皇帝フビライは，元至4年（1267），霊巌寺に副長老となる正広副寺の編制，税金免除などの特別優遇措置をとった。同年に正広長老に“普覚大禅師”の称号を授与した。これらの点は霊巌寺内の『元聖旨碑』に刻まれている。また，明代皇帝明英宗は1455年に『大蔵経』を霊巌寺に授与した。清代乾隆皇帝（1736～1795）は9回も霊巌寺を訪れ，百余の詩を残した。

(4)　山東仏教における教義の変容

僧朗は泰山に身を寄せながらも，仏法教義における外部との交流を図った。363年，僧朗は同窓である道安を長安から霊巌寺に招き，仏法教義を討論する“金輿谷の会”を開いた。その状況は『高僧伝』巻五「法和伝」に次のように記されている。道安はかつて弟子の法和とともに泰山の金輿谷で法会を営んだが，そのとき，2人は山頂で遥か彼方を望みつつ，死後の帰趨について論じた。道安は，「法師は心を持つこと在る有れば，何ぞ後生を懼れん。若し慧心萌さざらば，すなわち悲しむべし」と語った。つまり，修行して智慧が備われば，そのまま解脱に到達できるのであり，もう輪廻転生することを畏れることはない，という意味である。

僧朗がかつて長安で『放光般若経』を講義していたとき学僧の中に僧叡がいた。僧叡がさまざまな意味深い質問をして僧朗から高い評価を得たことが『高僧伝』巻六に記されている。僧叡は性空について深く理解したのち鳩摩羅什の翻訳助手になり，羅什が訳出した『智論』『中論』『十二門論』『小品般若経』『大品般若経』などに序を著した。羅什門下四聖の1人に数えられた僧叡は霊巌寺に到り僧朗の講義を聴いたこともあるという。こうしたことから，僧朗の時代に山東仏教は般若経を中心に教義を展開したことがわかる。その後も，羅什の弟子たちとの交流が続いたため，山東仏教は天台宗の教義も取り入れ，中国仏教の主要教団の1つになっていたと考えられる。

713年に禅宗北宗開祖神秀はその弟子降魔禅師を霊巌寺に派遣した。以来，霊巌寺は禅宗北宗の北方における活動中心となった。禅宗の教義は，仏法の真髄は坐禅によって直接に体得されるとし，教外別伝・不立文字・直指人心・見性成仏の4点を主張する。霊巌寺は，降魔禅師が中心となる禅宗北宗から，浄如や道詢が中心となる黄龍宗，玄公が中心となる雲門宗，広琛が中心となる臨済宗へと変遷した。元代に入ったのち霊巌寺は曹洞宗の中心地となった。したがって713年から現在までの1200年間，山東仏教の教義は主に禅宗であったといえる。

7．霊巌寺の変遷

霊巌寺は山東仏教の中心であり教団の拠点であった[25]。僧朗の時代から現在にいたるまでの約1700年にわたって4回の法難（三武一宗）と多くの戦乱に遭い，破壊され荒廃した精華がたくさんあったに違いない。しかし，霊巌寺はすべての苦難をのり越えて現在でも生命力を保っている。現在も数十名の出家僧が修行しており，毎年，仏教活動と法事に多くの信者が集っている。筆者は2008年3月に霊巌寺を再訪した。筆者が撮影した写真（図1～6）を用いて，よく利用されている主要仏殿の実態について考察してみる。

(1)　世界一の彩絵泥製羅漢像

霊巌寺の山門は金剛殿とよばれ，元代に建てられたのである。2体の金剛はすでに壊れて，現在の金剛は1985年に新たに造られたものである。山門に入るとすぐ

天王殿があり，中に弥勒菩薩が安置されている。両脇には四天王がある。しかし，もとの仏像はすでに壊れて，現在のものは1994年に再造されたものである。天王殿を出ると両側に鍾楼と鼓楼，前に大雄宝殿がある。大雄宝殿は宋政和年間（1111～1114）に建てられ，当時の名は“献殿”であった。明正徳（1506～1521）年間に魯王の出資で三尊像が造られたため，大雄宝殿の名に変更された。清代になると十六羅漢像も両側に造られた。しかし，当時の仏像はこれもまたすでに壊れたため，いまの釈迦如来，薬師如来，阿弥陀如来，脇侍の菩薩仏像はすべて1994年新たに造られたものである。大雄宝殿の前に五花閣があるが，すでに壊れて残壁しか見えない。

五花閣の奥に千仏殿がある。千仏殿は唐貞観年間（627～644）に建てられ，宋嘉祐6年（1061）に再建され，明嘉靖年間（1522～1566）に重修された。千仏殿は霊岩寺の主殿である。殿内真ん中には1.23m高さの石製須弥座があり，上に三身仏が安置されている。中尊は法身の毘盧遮那仏（ビルシャナ）であり，高さ5.46mの金像，宝冠づけ，蓮華座，説法印となっている。花弁の形の光背は天界のイメージを呈している。千葉蓮花の形となっている蓮華座は宋代の木刻である。蓮の1花弁が1三千大千世界を表し，蓮華座全体が華蔵界を意味する（図1）。東側の左尊は報身の盧舎那仏（ルシャナ）であり，高さ3.87m，全身に金箔，肉髻相，触地印となっており，銅2,500キロで鋳造されたという。火焔の形の光背には悪魔，野獣，美女などが配されており誘惑の世界を呈している。西側の右尊は応身の釈迦牟尼仏であり，高さ3.67m，茶色，肉髻相，禅定印となっている。銅2,500キロで造られたという。舟の形の光背は花園のイメージを呈している。三尊仏像はすべて結跏趺坐，端正な容貌，筋模様がなめらかな服装となっている。三尊仏像背後の壁および周りの壁に高さ30センチほどの瞑想する仏像がはめられている。その数は1千体もある。千仏殿と呼ばれるゆえんである。

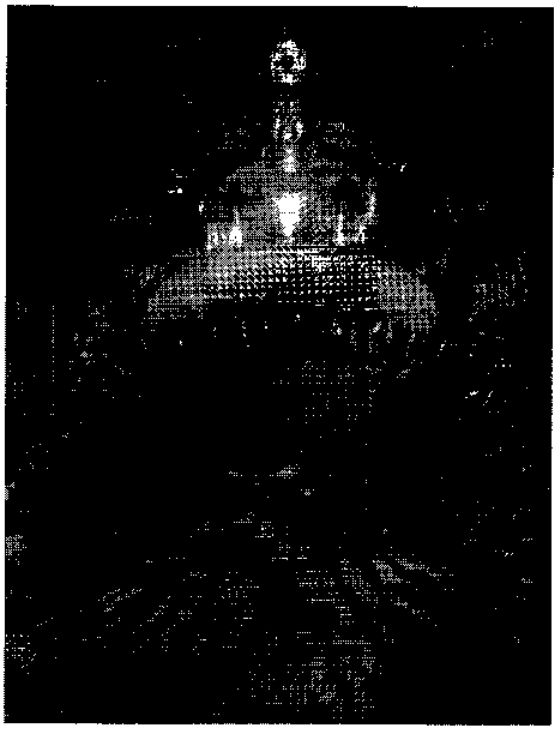

図1　千仏殿内三身仏中尊の毘盧遮那仏
5.46mの金像，宝冠づけ，蓮華座，説法印。蓮華座の1花弁が1三千大千世界を表し，蓮華座全体が華蔵界を意味する。

千仏殿の4壁に沿って40体の彩色上絵の泥製羅漢像が安置されている。これは霊巌寺文物の精華であり，国宝に定められている。泥で造られた塑像は約1000年を経てきたが，いまなお色が鮮やかで，表情が生き生きとしている。羅漢像は80センチの高さのレンガー台座に置かれ，座高1.80～1.90m，普通の人間より少し大きい。羅漢は煩悩を解脱したが菩薩の境地に

入っていない修行者であるとの考慮で，羅漢像は現実の人間にきわめて近い表情，性格，形体を有するように造られている。40体の羅漢像は，同じものがなく，いずれも形体が太痩老若，個性が豊かで写実的である。あるものは穏やかな表情を見せ，あるものは眼光鋭く激しい表情で，またあるものは懐疑的に浮かばぬ表情を見せている。あるものはきちんと装い，あるものは胸をはだけている。服装はすべてに華やかで派手である。手の表情も豊かであり，指差す方向を見ると，そこに確かに何かがあるような錯覚を受け，ついその方を見てしまう。また，顔，胸，手足などに露出した筋肉と骨格の細かい脈絡をみると，羅漢像をつくった人たちは人体解剖に豊富な知識を持っていたことがわかる。40体の塑像のうち，32体は宋治平3年（1066）に造られ，8体は明代に補造されたものである。なかには霊巌寺開祖僧朗の羅漢像もある（図2）。

千仏殿の入口に清末著名学者梁啓超（1873～1929）の筆になる「海内第一名塑」と，書画大師劉海粟の手になる「天下第一名塑」の石刻が置かれている。霊巌寺の彩絵泥製羅漢像の造像方法はいままでの仏像づくりとは全く異なっている。インドやガンダーラの要素は全く見えず，敦煌莫高窟の壁画技術の影響も受けず，これは儒教と道教の造像方法を融合した中国東部独特の造像手法であり，山東仏教にしか見えない特徴であるといえる。

図2　世界一の彩絵泥製羅漢像
千仏殿に40体の彩絵泥製羅漢像が安置されている。これはその1つである山東仏教と霊巌寺開祖僧朗の羅漢像。

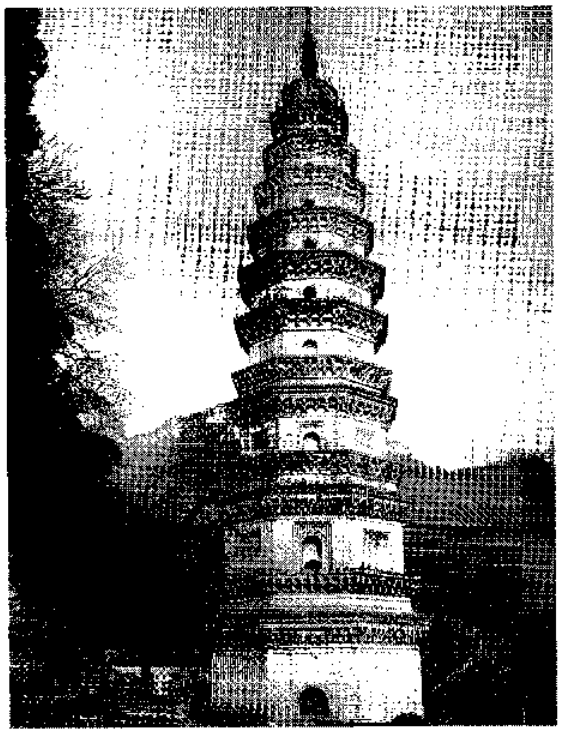

図3　霊巌寺のシンボルである僻支塔
54mの高さ，楼閣式。塔基は石で築いた八角形の台座，塔身は青煉瓦。

(2)　40枚のアショーカ王浮彫群

千仏殿の西北に僻支塔がある。これは霊巌寺のシンボルである（図3）。

僻支塔は唐天宝十二年（753）に建てられたが，法難や戦乱で破壊された，数度にわたる修復を通じて，宋嘉祐2年（1057）に完成されたという。僻支塔は八角九層，54メートルの高さ，楼閣式の煉瓦製塔である。境内のどこからでも見える。塔基（塔の基礎）は石で築いた八角形の台座であり，塔身は青煉瓦で造られた。各層には四門四窓が飾られている。塔身には鉄製の塔利が付けられている。宝蓋（頂点）から8本の鉄チェーンが下へ垂れて8個の金剛とかみ合っている。この塔の製造技術は極めて高い。霊巌寺には歴代の住持や高僧の仏舎利をまつる墓塔林がすでにある。ところで，高さ54mの僻支塔がいったい何の目的で造られたのか。いまだに不明のままである。塔の下に複雑な機関が設置され現在では発掘できない状況にある。そこには釈尊の仏舎利がまつられ霊巌寺を鎮護しているとの説もある。

僻支塔にはもう1つの謎がある。それは塔基の立面ごとに5枚の浮彫があり，8つの立面に計40枚の浮彫が造られていることである（現存37枚）。この40枚の浮彫は，古代インド，マウリヤ朝第3代の王アショーカ（前268～前232）の生涯を描いている。アショーカ王は残酷な性格で，即位後しばらく暴政を行っていた（暴虐のアショーカ）。図4は楽しい地獄の中の蓮華を描いている浮彫である。暴虐のアショーカ王は，王自らが刑を執るのはよくないとの家臣の配慮から死刑執行人を用意しようとした。国一番の外道ギリカに，外側は美しいものの，それにつられて中に入ると殺される“楽しい地獄”を建設することを命令し，ギリカをその番人とした。ある日，一人の比丘が楽しい地獄の前を通りかかり，その美しさにひかれて中に入ってしまった。ギリカは即座に殺そうとしたが，比丘は「私は悟りの境地を得ようと修行してきました。その目的を果たさないうちは死ねません。一週間待ってください」と頼んだ。比丘は一週間，この世の無常について瞑想しつづけ，ついに悟りを得ることができた。そこに，ギリカが現れて，比丘を熱い油でみちた大釜の中に投げ込んだ。もう死んだ頃かと中をのぞくと，熱い油の中には一本の蓮華がはえ，比丘はその上で涼しげに結跏趺坐を組んでいる。驚異を聞いてやってきたアショーカ王に対して比丘は説法した。これを聞いたアショーカ王は今までの残忍な行いをやめ善行を積むことを決心した。

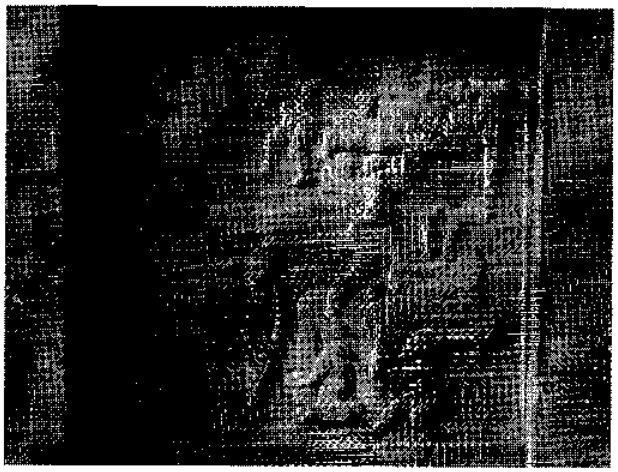

図4　楽しい地獄の中の蓮華
熱い油で満ちた大釜の中に投込まれた比丘は一本の蓮華の上で結跏趺坐を組んでいる。

アショーカ王は，在位第9年（前259）にインド半島北東部のカリンガ国を征服し，南インドの一部を除く亜大陸全域の統一を達成した。しかし，この戦争は10万人が殺され15万人が捕虜となったきわめて残虐非道なものであった。アショーカ王は，自らの行いを悔やんだ。ある日，仏教長老のところに行き，長老の開示を得

て，武力征服政策を放棄し，法（ダルマ）に基づく政治を行うことを決意した。図5は長老がアショーカ王に説法を描いている浮彫である。深く仏教に帰依したアショーカ王は，仏法に従った統治を心がけ，理想の君主となった（慈悲のアショーカ）。また，インド各地に石柱を建て，そこに釈尊の教えを刻み仏教を広めた。アショーカ王は仏教教団を手厚く保護し，領内に8万4000の仏塔を建て，仏跡を訪れて供養し，第3回仏典結集と西方への伝法を促進した。アショーカ王は晩年に仏教教団への莫大な寄進を企てたため，それに反対する王子や大臣に幽閉され，苦悩のうちに死去したと伝えられている。アショーカ王が建てた8万4000の塔の1つは，中国浙江寧波府のアショーカ王山広利寺にあったといわれる[26]。

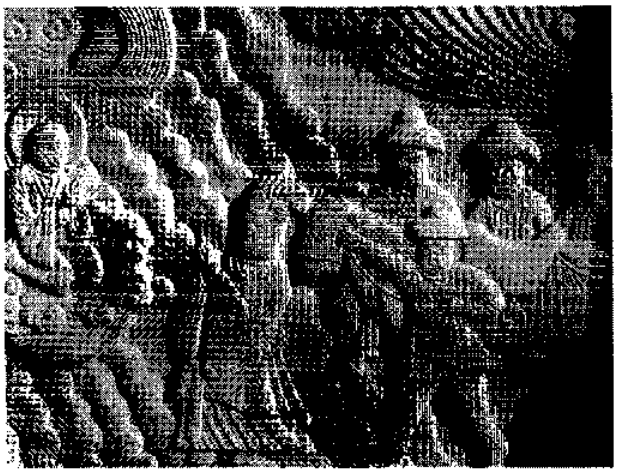

図5　アショーカ王への説法
アショーカ王は前259年カリンガ国を征服した後，自らの行った悲惨な戦争を悔やんだ。煩悩の中で仏教長老を訪ね，説法に開示され仏教に深く帰依した。

図6　石刻芸術にあふれる墓塔林
墓塔林は霊巌寺歴代住持および高僧の仏舎利をまつるための石塔群である。塔の総数は167，墓碑の総数は81。

アショーカ王の生涯を描いた40枚の浮彫は，刻線詳細，構図厳格，重点明確，中国伝統の彫刻手法によるものである。人物の形象と服は中国化されており，とくにアショーカ王は完全に中国皇帝の形象にされていた（図5，仏の右側の人物）。アショーカ王の生涯を描いた40枚にも上る浮彫群は中国で霊巌寺にしか残存せず，きわめて貴重である。

(3)　石刻芸術にあふれる墓塔林

僻支塔からさらに先に行くと，慧崇塔を含み墓塔林が見える。墓塔林は霊巌寺歴代住持および高僧の仏舎利をまつるための石塔群である。塔の総数は167，墓碑が81もある。塔と碑に文字が刻まれている他に，芸術性の高い精巧な彫刻が施されている。墓塔林は石刻群でもあり，そこに唐から明までの石刻技術と芸術の変遷が記録されている。塔と碑の形状は方碑形，鐘形，太鼓形，経幢式，楼閣式など多く

の種類がある。基礎や塔身には托塔，力士，飛天，舞伎，獅子，飛馬，蓮華など多種多様なものが刻まれている（図6）。霊巌寺の墓塔林は少林寺につぐ中国2番目の規模である。なかには第39代住持である日本人僧邵元の塔もある。墓塔の碑銘の冒頭には「日本留学僧邵元」と刻まれ，銘文には邵元の生涯が記述されている。邵元は今から約800年前，宋代末ごろ日本からの留学僧として中国に渡った。その後，彼は一念を発して山東にある霊岩寺を目指すことになる。青年僧邵元は霊岩寺で懸命に修行し，最高位の住持となり，山東仏教の発展に貢献した。

8．山東仏教の限界―儒教と道教の聖地

仏教はインドから西域を通して中国へと伝来した。前2年の初伝から中国社会に定着するまでの320年間は，2つの流れが絶え間なく続いていたことがはっきりしている。その1つは，インド・西域・中国の訳経僧は仏典を将来して漢訳を行い，仏法の経・論・義を広げた経典を重視する流れである。その代表者は鳩摩羅什である。もう1つは，寺院を建立し，教団を組織し，宣教を実施した仏法の実践を重視する流れである。その先駆者は仏図澄である。そしてこの2つの流れが融合したところに中国仏教が生み出されたのである。なぜこのように考えられるのか。まず，インド仏教にない論と義を創りだした中国仏教の確立者は，経典の研鑽と仏法の実践の両方に力を尽くした人々である。たとえば，般若経典の注釈・経典目録の作成・翻訳論の創出・仏教儀礼の整備を行った道安，念仏三昧の義と沙門不敬王者論を創出して廬山教団を組織した慧遠，頓悟成仏と闡提成仏の義を創りだした道生，物不遷論・不真空観・般若無知論・涅槃無名論・宗本義の五論を創りだした僧肇，等々。

次に，互いの関係を見ると，道安は仏図澄の弟子，慧遠は道安の弟子，道生は慧遠の弟子であり，そのつながりをまとめると仏図澄→道安→慧遠→道生となっている。この中に，道生は僧肇とともに鳩摩羅什の門下四聖の2人でもある。とくに道生は，慧遠と羅什の共通の弟子であり，2人の高僧の教えを一身に受け継いだのである。また，羅什が国師の礼で亀茲から長安に迎えられたのは道安の薦めである。しかし，羅什が長安に入ったとき道安はすでに没していたため両者の出会いは叶わなかった。しかし道安の弟子慧遠と羅什は，往復書簡を通して『大乗大義章』を創りだすほど深く交流した。このような人間関係が，中国仏教は訳経や経典の研鑽を重視する流れと仏法の実践を重視する流れとの融合によって確立されたことをはっきりと示している。

中国仏教を確立するために道安が奮闘しているのと同様に，その同窓の僧朗は，仏図澄の教えを受けつぎ，泰山で新しい教団を立ち上げ，山東仏教を開いた。山東仏教は羅什の訳出した経典に序を著した僧叡との交流があったが，大規模かつ事業レベルには至らなかった。この意味で山東仏教の源は，仏法の実践と教団の建設を重視する仏図澄にあるといえる。その特徴を次の3点にまとめてみる。

①山東は，周公（易経や周礼を著述した）や孔子等の先哲の故郷であり，儒教と道

教の聖地であり，黄河文明の発祥地である。数千年にわたって積み重ねた伝統文化の中に入り込んだ仏教に対しては，積極的な受容がなく，認知が薄かった。儒教と道教が壁のような存在であり，山東仏教はそれをのり越えることができなかった。

②山東仏教は仏法の実践と教団の建設を中心にした。そのため，新しい論と義の創造に力を注ぐことができなかった。山東社会の実情にマッチする仏法の解釈を展開できなかったことは，山東仏教の特徴を前面に出せず，社会受容と大衆の理解に訴えるのにつながらなかった。

③山東が中心となる黄河流域では戦乱が頻発し，民衆が長期に苦しい生活にさらされた。山東仏教は，民衆を苦しみから救うため，霊巌寺にアショーカ王の生涯を描いた浮彫群を造り，王の仏教帰依の事例を用いて，中原の君主たちに慈悲による治世の仏教平和思想を広げた。

霊巌寺僻支塔を発掘すれば山東仏教の実像をさらに解明できる。これらの考古学的成果に注目して今後はさらに研究を進めていきたい。また，隣の河南省には少林寺という著名な寺院がある。霊巌寺と少林寺との交流がどのようなものであったかも今後の研究課題としたい。

注

1）『三国誌』・魏誌・魏略・西戎伝は次のような記述がある。「昔漢哀帝元寿元年，博士弟子景盧受大月氏王使伊存口授仏屠経」。すなわち，前漢の哀帝の時，景盧が大月氏の使者伊存から仏教経典の口授を受けたということである。漢哀帝元寿元年は前2年，仏屠経は仏典のことである。大月氏は西域にある遊牧民族であり，匈奴に追われてイリ地方に，その後は烏孫に追われてアム河畔に移り，一大国家を建てた。紀元前1世紀ごろ仏教を信仰していた。

2）『高僧伝』は中国をはじめ，朝鮮，日本における仏教の高僧たちの伝記集である。最初の『高僧伝』は南朝梁の慧皎によって編纂され，519年に完成されたものである。仏教初伝から6世紀初の梁の武帝までの高僧たちの列伝とも称すべき序録1巻と本文13巻の十四巻構成となっている。全体は訳経，義解，神異，習禅，明律，遺身，誦経，興福，経師，唱導の10科に分類され，本伝に257人，附見200余人という高僧たちの伝記が収められていて，仏教史研究に不可欠の史書となっている。

3）白馬寺については，『高僧伝』巻一の初めの文に記述されている。

4）鴻臚寺は，漢の時代から外国来賓の接待および朝貢などを司った官役である。

5）北魏の都洛陽では，城内の3分の1が寺院で占められたという。その盛況は『洛陽伽藍記』に詳しく記されている。

6）笮融（？～197，後漢末期の武将）は，広陵と彭城で3,000人が修行できるほどの大寺院を建立した。また，毎年の仏誕節である4月8日には灌仏会という盛大な法会を執り行い，寺に至る者は5,000人に達したとされる。詳しいことは『三国誌・呉誌』に記されている。

7）寺院の形態および殿堂配置については次の文献を参照されたい。張偉然・顧晶霞編2007『中国佛寺探秘』長春出版社。井上暉堂2005『お寺のしくみ』日本実業出版社。

寺院における仏塔の意味については次の文献を参照されたい。杉本卓洲2007『ブッダと仏塔の物語』大法輪閣。

8）安世高（生没年不明）は，後漢の桓帝時代（147～167）に渡来した訳経僧である。安息国（パルティア）の皇太子位を放棄して出家，阿毘曇を学んだ。のち中国伝道を志し，147年洛陽に至り，以来20余年の間に『安般守意経』等34部40巻を訳出した。後漢末の戦乱期，安世高は廬山から予章に到り東寺を建立した。さらに，広州をめぐり北上して会稽にまで来たとき，市井の乱闘に巻き込まれ殺された。安世高の南進によって洛陽や長安に集中していた仏教を南方に広げたことが説かれている。

9）安玄は安息国の僧である。後漢の霊帝末年，洛陽に来た。安玄が梵語で口述して厳仏調が受けて漢文で筆写し，二人は共同で『法鏡経』を訳出した。

10）支婁迦讖，また支讖，もとは大月氏の人である。後漢の霊帝のときに洛陽に出て訳経に専念した。179年に訳出した『道行般若経』『般舟三昧経』『首楞厳経』は中国社会に大きな影響を与えた。また『阿闍世王』『宝積』など十余部の仏典も訳出したが，残存していない。

11）支曜は後漢の霊帝・献帝のとき『成具定意』『小本起』などを訳出した。

12）竺仏朔はインド人であり，後漢の霊帝のとき『道行経』を将来し，洛陽で訳経を行った。

13）康孟詳は後漢の霊帝・献帝のとき洛陽で『中本起』『修行本起』を訳出した。

14）康僧会は先祖は康居であり，代々インドに住んだ。10歳で出家し，学問を好み，三蔵を理解し，六経にも広く通じた。呉の赤烏十年（248），建業（南京）に至り，孫権と面会した。孫権は感服して，康僧会のために建初寺を建てさせた。康僧会は『阿難念弥』『鏡面王』『察微王』『梵皇経』などを訳出した。呉の孫晧は法令を悪用して寺院を破壊しようとした。孫晧は才弁にすぐれた張昱を派遣して康僧会を詰問させたが，康僧会はこれを論破したという。

15）『出三蔵記集』は中国で訳出された三蔵に関する現存最古の経典目録である。南朝梁の僧祐（445～518）が著し，15巻がある。まず仏経と漢訳の起源を述べ，ついで後漢から梁代にいたるまでに訳された仏典の目録を掲げ，さらに120編におよぶ経典の序と後記を集録し，最後に訳経僧32人（うち外国22人，中国10人）の伝記を載せている。仏典漢訳史における最重要資料の1つである。

16）曇柯迦羅は中インドの人であり，家は代々富豪で，ひと通りインドの学問を修めた。魏の嘉平年間に洛陽に来た。多くの中国僧が戒律に帰していなかったことを見て，曇柯迦羅は『僧祇戒心』を訳出し，中国に戒律を広げた。

17）曇帝は安息国の僧であり，律学に詳しい。魏の正元年間，洛陽で『曇無徳羯磨』を訳出した。

18）康僧鎧は魏の嘉平末年，洛陽で『郁伽長者』など四部の経典を訳出した。

19）帛延は魏の甘露年間，『無量清浄平等覚経』など六部の経典を訳出した。

20）維祇難はインド人である。出家して僧となり三蔵の学問を受けて諸国を巡った。呉の黄武三年（224），竺律炎と武昌で『曇鉢経』を訳した。

21）鎌田茂雄1987「西域の大宣教者―仏図澄」『大法輪』1987年1月号38－43頁。任継愈

編，丘山・岩城・河野他訳 1994『定本中国仏教史Ⅱ』151－222 頁，柏書房。

22) 道安（312～385）は中国南北朝時代の僧である。仏弟子は釋尊の“釋”を姓とすべきであるとして，釈道安と名乗った。仏図澄に学んだのち，戦乱を避けて各地を転々としながら仏法の修行と広布に努め，晩年は前秦の苻堅の尊信を得て長安で過ごした。般若経典を研究し，瞑想を重視し，教団の規律を整え，経典目録『綜理衆経目録』を作成し，数百の弟子を育成するなど，中国仏教発展の基礎を築いた。弟子に廬山の慧遠，僧叡らがいる。

23) 鳩摩羅什（344～413）は中国を代表する訳経僧である。インドの貴族の血を引く父と亀茲国の王族の母との間に生まれた。最初は原始経典や小乗仏教を学んだが，やがて大乗に転向して中観派の諸論書を研究。384 年，亀茲国を攻略した呂光の捕虜となり，401 年に後秦の姚興に国師の礼で長安に迎えられた。鳩摩羅什は仏図澄と違い，持戒や習禅よりも仏典の翻訳と講義に全力を傾け，74 部 384 巻の大乗仏典を訳出した。その翻訳は，新しい文学と哲学の金字塔であると評価された。

24) 鎌田茂雄 1987「山東仏教の開祖・泰山僧朗」『大法輪』1987 年 4 月号 90－95 頁。任継愈編，丘山・岩城・河野他訳 1994『定本中国仏教史Ⅱ』151－222 頁，柏書房。

25) 霊巌寺については次の文献を参照されたい。霊巌寺編集委員会 1999『霊巌寺』文物出版社。房澤水編 2000『霊巌遊翰輯古』中国文聯出版社。劉継文 2005『済南神通寺』山東友誼出版社。

26) 西晋の大康 2 年（281），慧達が山中でアショーカ王が建てた 8 万 4000 の塔の 1 つといわれる古塔を発見し，滅罪のために一寺を建立した。435 年にカシミールから来た曇摩蜜多が寺塔を建立して広利寺と称した。また，522 年に武帝が広利寺を修復してアショーカ王山広利寺と命名した。この点については，『禅宗小事典』（石川力山編，法蔵館，1999）を参照されたい。